

11月例会は『ジョニーは戦場へ行った』

12月の『60歳のラブレター』上映会に協力します

加古川シネマクラブの例会は、近年に上映された作品の中から選定してきました。しかし、11月例会では、約40年前の旧作『ジョニーは戦場へ行った』を鑑賞することになりました。

その理由は、選定のときに特に強く推薦される作品が無かったこと、一般向けにこの作品の上映会を実施したいという声がかかったこと、他の例会候補作品は、経費が高額になるため経費面で避けたかったこと、60歳以上の人は観ている人が多いが50歳以下の人はほとんど知らない名作であること、などです。

そこで、50歳以下の人の声に応え、旧作の鑑賞会を試しにやってみることになりました。

内容の知らないまま、無防備に映画を観ると、新鮮な感動を受けることもあります。ショックを受けたり、不快感が残る場合もあります。

この作品は、「戦争の残酷さと生命の輝きを浮き彫りにした名作」、「一度は観るべきだが二度は観たくない生涯忘れられない作品」などと評される衝撃の感動作品で、心の準備をしてから鑑賞することをお勧めします。

例会のお知らせ

■名称／第45回例会『ジョニーは戦場へ行った』

■日時／11月18日(水) ①PM2:00～、②PM4:20～、③PM6:40～

■場所／加古川総合文化センター大会議室(JR 東加古川駅から北へ徒歩10分、車は加古川バイパス加古川東ランプ北へすぐ)

■受付／入会手続きが終わっている方は、受付に同封の「例会参加券」をお渡しください。

入会手続きを行っていない方は、受付で4箇月分の会費(2000円)を支払い、入会手続きを終えてから、「例会参加券」をお取りください。



【例会作品データ】

■タイトル／ジョニーは戦場へ行った

■監督／ダルトン・トランボ

■出演／ティモシー・ボトムズ、キャシー・フィールズ、ジェイソン・ロバーズ、マーシャ・ハント、ドナルド・サザーランド、ダイアン・ヴァーシ、デヴィッド・ソウル、モーリス・ダリモア

■データ／1971年、アメリカ、112分、ドラマ／戦争

■作品紹介／戦場で両手、両足、耳、眼、口を失い、第一次世界大戦が終わってから15年近く生き続けたイギリス将校が実在したという事実をヒントに、ダルトン・トランボが1939年に発表した小説「ジョニーは銃をとった」を、トランボ自ら脚本・監督した反戦映画。

第一次大戦下、戦場で被弾したジョニーは、両手両足と顔面を吹き飛ばされ、目も耳も口もすべて失っていた…。

肉体のすべてを剥ぎ取られてもなお人間の尊厳を失わない主人公に、反戦を強烈に訴えた不朽の名作。

協力事業上映会のお知らせ

加古川シネマクラブは、兵庫県映画センター主催で12月9日(水)に加古川総合文化センターで実施する『60歳のラブレター』の上映会に協力します。

この作品は、仕事一筋の夫と専業主婦が、夫の定年退職を機に離婚し、同世代の夫婦と織りなす人間模様を描いたもので、人によっては身につまされるお話です。



監督は、深川栄洋、主演は、中村雅俊、原田美枝子。10時30分からと13:30からの2回、入場料一般1,200円、その他、加古川シネマクラブ会員割引有り。お問合せは、兵庫県映画センター078-331-6100、または加古川シネマクラブまで。

井筒監督新作『ヒーローショー』ロケ見学記

井筒和幸監督の撮影現場を一度見てみたいと思っていたのがついに実現しました。

千葉県がメインのロケ地でしたが、東京・東中野のアパートでの撮影があるという情報をキャッチして、行くことにしたのです。現場のアパート二階が狭いということで、スグ下の路地にモニターと録音機材が置かれていて、監督はモニターを見ながらの演出です。準備、テスト、本番と、部屋の T シャツの色が良くないとか、風呂帰りの雰囲気がない、とか役者の「間」が合わないとか、監督・スタッフから声が出て、その都度、モニター画面の映像が縮まっていくのが分かります。監督はスタートの合図を「アクション」、OKに「良！」と言い、時にスタッフに「いけてるな」と確認しながらの撮影でした。監督は、役者さんには心理状態をていねいに伝えているのが、スグ横で見ていてよくわかりました。スタッフは、いちいち監督の指示を受けるでもなく、スムーズに次の準備にかかり、二階の部屋を外から撮る際にはカメラを置くイントレもタイミングよく用意されていたりしました。

この日はナイターで、17時に集合して、順調にあって午前様、ヘタすると明け方まで、の予定でしたが、私の見ている4時間ぐらいでの本番を全部合わせても1分あるかどうかの、まさに手作りそのものの現場でした。準備中にリラックスして雑談する監督と、本番での緊張感あふれる監督と、やっぱり撮影現場ならではの体験でした。(健)

全国映連靱フェスティバルに参加して

10月17日と18日、景観を守るため埋め立て差し止めの地裁判決が出た直後の靱で開かれた**全国映連交流集会・靱フェスティバル**に参加してきました。

記念講演の**松居秀子**さんは、差し止め訴訟の原告の一人であり、**宮崎駿監督**が靱に滞在したときのお世話をした人でもあり、貴重な話を聞くことが出来ました。宮崎さんは滞在中、毎日奥さんに絵手紙を出していたそうで、それも『崖の上のポニョ』の制作に役立ったのではないかと、自炊のための買い物姿が地元の人に好感を持って見られていたようだ、とか。ほとんど表に出ていませんが、ジブリが町家改修経費の一部、ン千万円の寄付をしたとか、その町家のガラス、ステンドグラスは宮崎さんのデザインになっている、とか。

靱の街並みをガイドさんの案内で散策しましたが、懐かしい、落ち着いた、ゆっくりした気分になる街で、歴史もあり、埋め立て計画による街の壊し方の

酷さが想像できました。

映画や活動の話は例年より少なかったものの、街を丸ごと体験したという意味では、有意義なフェスだったと思います。札幌はじめ各地の旧知の連中の相変わらずの顔も見られたし。(健)



靱の景色(崖の上の円福寺周辺)

前回例会の報告

9月16日(水)の例会では、**高橋伴明**が監督し、**中村勘三郎**が鎌倉時代の禅僧道元を演じた『**禅 ZEN**』を鑑賞しました。落ち着いた良い作品でした。

ありがたいことに、会員数が少しずつ挽回されてきました。参加者数136人。

つれづれ編集後記

今月は、健さんから、二つの原稿をいただきました。ちょうど、靱と**宮崎駿監督**のことも書こうと考えていたところだったので助かりました。鎌倉時代の靱のお寺にあった仏画が、早くから加古川町の竜泉寺に移ってきたり、江戸時代に高砂の工楽松右衛門が造った波止場が残っていたり、靱は、同じ「みなとまち」の加古川高砂地域ともご縁があり、美しい景色と町並みを持ち続けているところです。

加古川市出身のニューヨーク在住の**松下俊文監督**の初の長編作『**パチャママの贈りもの**』が1月30日からワーナーマイカル加古川で上映されることになった。運営委員会で、この1年間、上映会に向けて検討していたが、観覧料で経費を捻出できないと判断してあきらめていただけに、地元のシネコンの英断に拍手喝采を贈ります。(赤根)

ご意見をお待ちしています

映画の感想や意見など、このニュースへ記事をお寄せください。200~300字程度にまとめていただければ助かります。おすすめ作品をファックス、メールや例会会場のアンケート用紙でお知らせください。

加古川シネマクラブ 〒675-0101

加古川市平岡町新在家 752-46 B-313 山本方

TEL 090-9283-0435 FAX 078-935-8528

E-MAIL cinemaclub@nifty.com

<http://homepage3.nifty.com/cinemaclub>

会員数 173 人(9月16日現在)